斯衛
コノエビジョク
朕辱
TOTAL ECLIPSE FAN BOOK
成人向

斯衛朕辱
コノIビジョク

斯衛躾辱

全く
ぷるんっ
実に卑猥な肉だな
ククク……
日本人らしからぬ熟しきった肢体をして
軍人などと宝の持ち腐れというものだよ
キュッ
有効利用して貰える事を感謝したまえ
いい格好だなタカムラ中尉？
……はい
ありがとう……ございい、ます……

さて
まずはやはり
この爆乳から……
ほぉお……
相変わらず
素晴らしい揉み心地だ
乳首ももう
勃起しているん
じゃあないか？
実にそそられる
いやらしい乳首だ
感度も
良好だな
本当に今まで
よく誰にも手を
出されなかった
ものだよ
そ、そんなに……♥

フフッ
ひゃふぅ
パクッ
ぷるっ
汗臭く甘酸っぱい
ぷる
蕩けきった女の味だな
そんなに乳首ばっかり
レロ
レロ
レロ
んくぅぅ
らめれすぅッ♥
グッ

はっ
ぷるっ
はっ
はっ
随分と感じているようだな
ぷるん
しかし本番はここからだぞ
君はココが感じやすいんだったね？
ちゃんと私も楽しませてくれよ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ま……まって……ッ
あへぇ♥
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ

くっくぅぅッ

素晴らしいっ最高の具合だッ

腋とおっぱい

こんなにされたらあ

か…感じすぎちゃ…ッ

おチンポピクピクってしてッ

おチンポ

クキ!!!メン

あっ

のおお♥

ビクッ

ビクッ

ビュクッ

ビクッ

ひぐんッ♥
あっ
くぅっ
ハぅッ
やっ…はぁ
ひいんッ そこッ
乳首いッ そんな…にいッ
コリ
コリ
モミ
は
フフッ いい触り心地だ
はぁ
眺めも 最高だね
モミ
この衛士強化装備 というのは 君の自慢の淫肉を よりいやらしくして いるな

肉奴隷の君には
やはりこの卑猥な衣装が
ピッタリじゃあないかね

ぶるる

モミ

モミ

モミ

あ!!あ

あッ

あんだ

クリ

そこっ

クイッ

めぇッ

グリッ

グリッ

んきゅぅ

グリッ

はっ♥
ふぅう
すぅ
おやおや
胸で随分感じているじゃないか
私のモノも君の乳同様
気持ちよくしてくれたまえ
ひあぅ♥
12

ふぉおおッ

こいつはやはり……ッ

おほぉおっ

そ……そんなに

激しくぅ♥

素晴らしい！君の淫穴に勝るとも劣らない

タカムラ中尉やはり君は最高の乳肉奴隷だな

おひんぽ♥おひんぽぉお♥

おいひいれしゅう♥

そんなにコレが好きなら

好きなだけ味わうといい

ふぅッ

ふぅぅッ タカムラ中尉ッ 口も乳もたまらんっ

はぁっ

ふぁ

まさに全身マンコじゃあないかッ

くぅぅ……

射精るぉぉ!!

ひあぁんっ♥
ビュッ
ビュルッ
ビュッ
ア
ア
タカムラ中尉
まだまだ本番は
これからだぞ
おわり？

乳兎・クリスカ
「そら、タカムラ中尉を見習ってもっと真面目に奉仕しないか」
「は……は、い。……ンッ、むぐ……ごふっ！　う、ぶぅぅッ!?
……は、はぁ……はぁ……んっぷ、う、ぇぇ……」
「ビャーチェノワ少尉。今日の君はテストパイロットではない。
ただの賭けの賞品、性処理用の乳便器なのだ。……それに、
シェスチナ少尉の分まで自分がすると言ったのは君だぞ？」
「今さら、無理だ、と言うならやはりシェスチナ少尉にも」
「そっ、それだけはっ！　……お願い、します。私は、
チンポ好きな……乳便器です……から！　どうか、
皆様の……チ、チンポは……私だけに、独り占め
させて……ください……う、うぅ……」
「そうかそうか！　この欲張り娘め。やはりタカムラ中尉に
勝るとも劣らぬ好色ぶりだ。さ、たっぷりチンポを味わえ」
「はむ、んぢゅちゅぅ♥　は、はい♥　おチンポ、いっぱい
しゃぶり、ます……この、無駄に大きな爆乳で、こってり
濃厚なチンポ汁、搾き……出します♥　タカムラ中尉にも、
溜しません……♥　おチンポ汁は、全部私のエロ乳便器に
ビュルビュルって、溢れるくらいブチまけて、ください♥」

乳兎・唯依
「くっ、ふぅ……ふ、ふはは。いいぞぉ、タカムラ中尉。やはり君達を賭けの賞品にしたのは……くっ、せ、正解だったな。大したスケベウサギだ」
「はい……ンッ、ふふ、ぢゅるる、レロロ……チュッ♥ はぁ……ありがとう、ございます……私も、御歴々の逞しいおちんぽにご奉仕出来て、光栄です……」
「そうかね？ そう言ってもらえると嬉しいな。そら、もっと強く挟みたまえ。遠慮は無用だ。大好きなチンポ汁をその爆乳膣でたっぷりと搾り摂るといい」
「はい……んっ、ふ、あぁ♥ おちんぽ、一生懸命挟みます……♥ 唯依はおちんぽ汁を乳内射精されるのが大好きな変態乳オナホです。ですから勝った方も負けた方も、唯依のおっぱいをいっぱいオマンコにしてください♥」
「クククク、乳オナホか。まったく、よくそんなえげつない言葉がポンポンと出てくるものだ。この淫乱爆乳斯衛め。帝国軍の女は皆こうなのかね？」
「い、いいえ……唯依、唯依だけです♥ 唯依は祖国の誇りよりもおチンポがくださる快楽を選んだ、淫奔で、みだりがましい、雌ウサギ、です……からぁ♥」

～雌犬斯衛～

上官からの呼び出しに緊張するというのは、何も珍しい事ではない。軍隊という徹底した縦社会組織に属している以上、いついかなる時にどんな命令が下されるやもわからないのだ。

日本帝国軍斯衛としてその使命と矜持を背負い、新型機開発のため身命を賭す覚悟をとうに定めてある唯依であってもその緊張と無縁ではいられない。もっとも、この緊張は一般的な事例とはその意味を大いに異とするものではあったが。

「篁唯依、御命令により出頭いたしました」

「ふむ。御苦労、中尉」

そう言って尊大な態度を崩さない大佐を前に、熱っぽく頬に朱を散らした唯依は身体の疼きを抑えるよう、毅然と丹田に力を込めようとした。しかしその程度では、体内に仕込まれた悪辣な玩具による刺激への防波堤となるには到底足りなかった。そも、この状態でまだ理性を保てている事が奇蹟に近いのだ。

度重なる媚薬の投与、終わりなき調教、言語に絶する羞恥責め――不知火弐型開発計画と、そのテストパイロットであり唯依が仄かな恋情を寄せる相手であるユウヤ・ブリッジスを盾にとった日々の淫獄により、もはや彼女の高潔な精神も陥落寸前だった。

そんな唯依の決して敗北すまいぞという悲壮な決意を嘲笑うかのように、大佐は無遠慮に歩み寄ると形良い尻を撫でた。

「ひぅっ、ぐっ！」

「ふむ。玩具はキチンと入れているようだね。……おや、こんなにビショ濡れでよくもまぁここまでバレずに来られたものだ」

肉付きの良い尻を堪能するかのように五指と平が這い回る。その微妙な力加減は、唯依のカラダを隅々まで知り尽くした者だからこそ可能な手つきだった。

「そっ、それは……あ、ぐ……な、なるべく、人に会わないよう、注意して……く、きふ、うぅ……っ」

「涙ぐましい努力だな、中尉。感動で噎び泣きそうだよ」

「ひひゃァアッ!?」

唐突に、今まで撫で回していた手が尻肉を握り締めた。それによって体内が狭められ、挿入された玩具が膣道を圧迫した。

「やっ、……んっ、あっ、ふぁああ♥」

「相変わらず感じやすい、良い反応だぞ中尉。最初の頃のあの気丈に睨み付けてくるのも悪くはなかったが、やはり女などこのくらい従順な方が可愛げがある」

「そ、んな……わっ、私、は……はっ、ひぅううっ♥」

時代錯誤の女性蔑視観。古い軍隊組織の悪しき慣習を引きずり続けている上官を軽蔑しながら、今の唯依の視線にはかつてのような力は無い。

「クックク。スカートの上からでももっちりと吸い付いてくるかのようだ。君ももう我慢なんて出来ないんじゃないのかね？　一日中生体バイブなぞ挿入したままでは、さぞや辛かったろう」

「はぐっ、た、大佐……おっ、おやめになって、ください……このような、コト……もぉ……あっ、……ひ、ひぅ、あ……♥」

薄ら寒い抵抗だった。

口ではそう言いつつも、唯依は自分でもどかしく腰を揺すり、尻を振っていた。大佐の手に熟れ肉を押しつけ、もっと強く揉んで欲しいと切求するかのように。

一度火が点いてしまった肉体は、そう易々と鎮めることなど出来はしないのだ。理性などでは決して押さえ込めない熱情があることを、唯依はカラダに刻み込まれてしまっていた。

「はぅっ、はぁ……ンッ、あっ、……あぁ……はぁっ♥」

今もし廊下で誰かとすれ違いでもしたら、上手く隠し通せる自信などありはしなかった。股間は湿り気を帯びるどころか愛液を垂れ流し状態で、下着もストッキングも小水を漏らしでもしたかのようにビショビショに濡れてしまっている。

「くっ、あっ……あぁあっ♥」

それでも自分からは決して求めようとしないのが、唯依の最後の抵抗だった。

欲しい。

この昂ぶりを鎮めてもらいたい。

肉の疼きが狂おしく、切ない。

それでも斯衛の誇りが、まだ微かに残されている。ユウヤへの想いが、雌に堕ちきることをとどめてくれている。

そんな唯依の葛藤を見抜いているのだろう。

大佐は不意に尻肉を鷲掴んでいた手を放すと、肉欲に打ち震える唯依から数歩

遠ざかった。
「あっ――」
思わず寂しげに大佐を見つめる唯依だったが、ただのお預けとは異なるらしい。ニタニタと不安を掻き立てる笑みを浮かべ、大佐は自身の指を舐めた。
「だらしなく濡らしおって。いかんなぁ、中尉。尻の方まで愛液が沁みておったぞ。これでは痴女だ」
「くっ、う……！」
厚恥に頬が熱くなる。
屈辱的な言葉責めのはずなのに、なおも疼いてしまう身体が恨めしかった。足下に落ちる淫蜜の、ピチョン、ピチョンという水滴音が殊更耳朶に響く。
「ふむ。フ、フフフフ。まぁそう恥ずかしがるな、中尉。そんな痴女斯衛な中尉も魅力的だぞ。そら、私の股間を見たまえ」
「う……あっ、も、もう、そんなに……っ」
大佐の股間はズボンが破けてしまいそうな程、今にもはち切れそうなくらい屹立し、それを見た唯依の鼓動は早鐘を打った。
太く、逞しい大佐の逸物。
これまでに何度も唯依のナカを侵略し悦楽を叩き込んだ、憎むべき、愛すべき肉棒。
あの様子では大佐も今すぐにでも挿入したいに違いないと察し、唯依は唇を強く引き結んで零れそうな唾液を飲み込んだ。
今の状態なら前戯など要らない。すぐにでも奥まで突き込まれ、力強い律動で犯されたい。子宮を直接叩いて欲しい。
そんな唯依の内心の切望をいたぶるように、大佐は言った。
「フフ。だが残念ながら、今日中尉に相手をして貰いたいのは私ではないのだよ。非常に残念ではあるが、ね」
「……え？　……あ」
と言うことは、また別の上官か。それとも下士官達にあてがわれ、彼らに一晩中輪姦されるのを見て愉しむつもりなのか。
どちらにせよ、想像しただけで疼きが激しくなる自身の不甲斐なさと淫猥さに唯依は顔を顰めた。自分はもっと貞淑な女だと、そう思っていたのに。剥がされた仮面の下にこのような本性が潜んでいたなどと今もまだ認めたくはない。

「すぐにも私のチンポが欲しいと言いたげだな、中尉。だが我慢して、私についてきたまえ」
そう言って大佐はドアノブに手をかけた。
「ッ！　……部屋を、出るのですか？」
「うむ。少し歩く。……バレるのが怖いかね？　まぁそんなに濡れていてはな。まさか事情を知らない者が一目で中尉のスケベぶりを看破するとも思えないが、お漏らしをしたくらいには勘違いされるかも知れんな」
おもしろがっているのだろう。尊大に振る舞ってはいるが、内心では腹を抱えて笑いたいのに違いない。
「別に行きたくないならかまわんよ。今すぐ自慰するなり何なり、自分で処理すればいい。……もっとも――」
「ふく……ぅあっ」
「それで中尉が満足出来れば、の話だがね」
退室しようとする大佐を睨みながら、唯依の膝は身体は小刻みに震えていた。悔しい、のに……逆らえない。そう躾けられてしまったから。自慰如きで満足など出来るものではない。
結局、唯依はそのまま黙って大佐の後ろに付き従った。
満足気な笑みを浮かべながら、大佐は扉を開けた。

■■■

幸いなことに移動中誰かと鉢合わせることもなく、しかし極度の緊張に晒された唯依は高熱に浮かされたかのように汗だくとなり、下半身だけでなく上半身もじっとりと濡れてしまっていた。
一刻も早く、楽になりたい。この疼きを止めるためなら何をしてもいい……そんな敗者的思考が首を擡げる。
（ダメ、だ……いつも、いつも……こんな、流されて……快楽に負けてばかりでは、わたし……本当に……）
「ついたぞ、中尉」

「……あ……ん、ぇ？」
ついたぞ、と言われてもそこは単に基地の中庭だった。広大なユーコン基地には幾つも存在する中庭の一つで、休憩時間には兵士や職員が昼食を摂り、煙草をふかし、或いはサッカーやバレーなどを楽しんでいる者もいる……そんな場所だ。
この時間は特に休憩をとっている者もいないのか、中庭は唯依と大佐の二人以外誰もいないようだった。とは言え、いつ誰が来るかもわからない。
（まさか、こんな場所で……？）
青姦も露出調教も初めてではないが、抵抗感は強い。それに特定の人間のみならず、不特定多数に見られるのはさすがに許して貰いたかった。もし万が一、顔を見知った相手……アルゴス試験小隊の面々や、ユウヤに見られでもしたら――そう考えると気が気ではない。
「あ、あの……大佐。……こ、ここで本当に……その、……しなければならないの、ですか？」
恐る恐る尋ねる唯依に、大佐はニコリと答えた。
「ああ。そのつもりだ」
「！　……そ、それは……基地内の風紀にも関わります。……その、……こんな所、では……」
「そんなことを言いながら、興奮しているのではないかね？」
「うっ、……うぅ」
火照った頬を隠そうにも、隠すための手すら赤く染まっているのではまったくの無意味だった。仕方なく、唯依は小刻みに震えながら直立不動を保ち、上官からの指令を待った。
「そんなに震えて……今日は少し肌寒いからねぇ。だが、大丈夫。すぐに温かくなるさ。すぐに」
いったい今日はこんな場所で誰の相手をさせられる事になるのか。奇妙な期待と不安に動悸を激しくさせる唯依を見やりながら、大佐はパチンと指を鳴らした。
「うむ、こっちだ。カール」
（……カール？）
ヨーロッパでは特に珍しくもない名前のはずだった。このユーコン基地にも、数えだしたら数十人単位でカール氏が存在することだろう。しかし、少なくとも唯依がパッと顔を思い出せる範囲ではカールという知己はいない。今まで相手をさせられた佐官や将官にもいなかった気がする。
（知らない、……初めての相手？）
いったいどのような相手か。出来ることならあまり無茶なことをしない真っ当な性癖の持ち主であって欲しいものだが――
「――いぇっ!?」
唐突に。
唯依は勢いよく背後から駆けてきた相手からタックルされてその場に転ばされていた。
（ふっ、不覚……！　いくら、興奮して……考え事をしていたからと言って……帝国斯衛ともあろう者がッ！）
いったい何者なのか。混乱する頭で兎も角体勢を立て直し相手の正体をはかろうとするも、圧倒的な力で組み伏せられて抵抗出来ない。
藻掻く唯依の耳元で、激しい息遣いばかりが聞こえてきた。
異常者か、或いは麻薬中毒者の類かと疑いたくなるようなそれはどうにも不自然だ。それに、匂いも。
「フフ。まったく、カールは元気がいい。だがブライブ！　そう、ブライブ。よーし、いい子だ」
大佐の口調と、耳元の息遣い。首筋にかかる吐息の、匂い。それに今、自分を抑えつけているそれは明らかに人間の手足ではなく……
「ま、まさか……」
結局は、思考がその答えを拒否していただけなのだ。考えるまでもなく答えは一つしかなかったのに、唯依は認められなかった。
当然だ。
何よりも彼女自身の最低限の願望として、相手は人間であって欲しかったのだ。
「どうだカール、気に入ったかね、その雌は？」
大佐の問いに答えるように、元気の良い鳴き声が響いた。
「驚かせてしまったか、中尉。こちらに転属になった際に連れてきたんだが、普段は中庭の隅で小屋に繋いであるからな。見るのは初めてだろう？」
見る――そう、見なければ、と思う。
少し首を回せば、唯依は相手の姿を見る事が出来るのだ。なのにそれが出来ないのは、現実を直視したくないというせめてもの抵抗だったのかも知れない。

生温かい空気がうなじに吹きかけられ、それと相反するようにゾワリと背筋を冷たいものが伝い落ちた。
「おいおい、いったいどうしたんだ中尉。……挨拶くらい、してくれてもいいんじゃないかね？」
「う……あ……あ、あ」
たった一連の動作。振り返って、そこにいるものを、見る。
それだけのために唯依は多大な労力を要した。生身でＢＥＴＡに立ち向かった時でさえも、これ程の恐怖と絶望は無かったように思う。それでも、拒否は出来なかった。
「……ヒッ!?」
振り返り、予想通りの答えに唯依は魂消るような悲鳴をあげた。
「初めましてだな、タカムラ中尉。私の家族にして、最高の友」
今すぐ立ち上がってこの場から逃げ出したい。どんなに無様でもいい、漏らしたような下半身を見知った相手に見られても構わない。だから、この現実から、逃避させて欲しい。
「愛犬のカールだ」
その唯依の願いを打ち砕くかのように、カールと呼ばれた大型犬は一際大きく遠吠えをした。

今の時世、ペットとして犬を飼える人間は少ない。特に最前線ともなる日本では飼い犬などもう何年も見た記憶は無かった。
それでも、唯依もまったく犬と触れ合った記憶が無いわけではない。幼い頃、父の友人の邸宅に連れられていった際にそこの飼い犬と楽しいひとときを過ごした覚えもあるのだ。
が、今唯依の目の前にいる犬は、そんな記憶の中の愛らしい存在とはあまりにかけ離れていた。
まず、大きい。
大型犬だとしても圧倒的だった。
頭高が唯依の腰より……下手をすれば胸に届きそうなくらいはある。組み伏せられた際に感じた力強さと重量感から察するに、体重も一〇〇キロ近くあるのではないだろうか。
「中尉は、犬には詳しいかね？」
大佐からの問いに、唯依はかろうじて首を横に振った。
「そうか。カールは私の自慢でね。グレート・デーンという犬種なんだが、世が世ならどんなドッグショーに出しても恥ずかしくはなかったろう生粋の純血種なんだ」
唐突に愛犬の自慢を始めた大佐がスッと右腕を上げると、カールは依然のし掛かったままではあったが唯依を拘束する力をやや緩めた。
「こいつももうすぐ三歳になる。人間で言うならもう立派な成人だ。そろそろ嫁を探してやりたいと思うんだが、今となっては相応しい血統の相手を見つけるのも難しくてねぇ。だからといって適当な雑種をあてがってやるのも忍びない。そら、タカムラ中尉、見たまえよ」
「……ヒッ、い……ッ!?」
カールが拘束を緩めたことで、唯依は彼の下腹部で隆々といきり勃つソレを直視してしまった。人間のモノとはあまりにもかけ離れた、異形の肉棒。赤黒く血の色をした棒状のそれには、まず人間で言うところの亀頭部分が無かった。太く長い肉筒は徐々に先細りし、先端は細く尖っている。それに何より、大きすぎる。唯依が今まで相手にしてきた幾人もの男達のモノよりも、一回りは巨大だった。二〇センチをゆうに超える巨獣根が、浮き出た血管をビクビクと激しく脈打たせている。
「可哀想に。カールはそのせいでまだ童貞なんだ。発情しても性欲を発散する相手がおらず、なんとも苦しそうでねぇ。どうにかしてやれないかと悩んでいた時に、思い出したんだよ」
そう言って大佐が指を鳴らしたのと同時に、カールは再び唯依に身体を密着させると、太股の辺りに陰茎を擦りつけ始めた。
「やっ、こんな、い、イヤッ、……ひぁあああっ!?」
端整な美貌が、恐怖に引き攣っていた。大型犬の圧倒的な迫力と獣姦という異常事態への怖れに、さすがの唯依も恐慌状態へと陥る。そんな唯依を現実に引き戻したのは、これもまた大佐のあまりに悪辣な言葉だった。
「『日本帝国』『斯衛所属』『篁家現当主』……カールには些か劣るかも知れない

が、そこそこ立派な〝血統書〟をつけた雌犬がこの基地にはいたはずじゃあないか、……とねぇ」
「なっ!?」
唯依にとって、これ以上の屈辱はなかった。これまでどのような責め苦にも耐え、身も心も淫獄に堕とされつつあったとは言え看過できようはずが無い。
「た、大佐！　いくら、なんでも……お言葉が過ぎます！　私個人を嬲り辱めるのなら、構いません。……ですが、我が祖国と斯衛、それに篁の家のことまで愚弄するのは……っ」
「許さない、と。……ほう？」
カールにのし掛かられたまま、満足に手足も動かせない状態で睨め上げてくる唯依の鬼気迫る視線を、大佐は軽く受け流した。
凄まじいまでの殺気も、怒気も、全て無力だ。それに、大佐は正しく理解していた。唯依が屈辱と恥辱の中にあってこそ一際淫らに乱れ、狂い咲く雌なのだという事を。
「クックク。そうだな、言葉が過ぎた。謝るよ、中尉」
「……そう、ですか。……なら……んっ、くひぃい！」
ますます興奮してきたのか、カールの腰を振る速度が尋常ではなくなってきた。人間と比べ上回っているのは、どうやら肉棒のサイズだけでないらしい。
「君はこれから私の大事な息子の嫁となるのだからねぇ。嫁の実家を悪く言うのは、確かに良くないことだったな」
「よっ、よめ、って……ッ……い、いやっ、いやぁあああ!!」
大佐の眼は、本気だった。
本気で愛犬に自分を犯させるつもりなのだ。それを改めて思い知らされ、唯依は再び藻掻いたがやはりビクともしない。巨獣根の感触がストッキング越しに尻や秘部へと伝わり、膣内の生体バイブの感触と相まって唯依を陶惑させた。このままでは下着まで突き破ってそのまま挿入されてしまいそうだ。それだけは、何としても防がねばならなかった。
「やめっ、やめてください大佐！　……大佐の、ぐっ、大佐になら幾らでもご奉仕します……から、ですが、こんな……い、犬の、……いっ、犬とするなんて、……ひぅうっ!?」
「そんなに嫌がらんでもらいたいな、中尉。上官が部下に見合い話を持ってくるくらい、ありふれた話ではないか。それに犬と人類は最古の、そして最高の友なのだぞ？　むしろ我が子同然のカールの嫁にと選ばれたことを光栄に思って欲しいものだ」
よくもまぁそこまでおぞましい事を平気で言えたものだった。
今の唯依に普段ユウヤ達に見せる気丈さは無い。そこには軍人としての、斯衛としての仮面を剥がされた年相応の少女が、気の狂いそうな異常事態に対し怯え、涙しているだけの姿があった。
「やだ……ぁ……い、いやぁ」
カールの動きが一層荒々しくなっていく。既に唯依の精神は崩壊する一歩手前だった。踏み止まっていられたのがむしろ彼女の心根の強さを物語っていたと言えるだろう。常人ならばとっくに壊れていてもおかしくはない。
「ひっ……あっ、あ……あぁあ……ーーーーっ」
「カール、ブライブ！」
張り詰めた神経の糸が切れるまさに寸前を狙い澄ましたかのように大佐はカールに待ったをかけた。極度の興奮状態にありながらも余程優秀な犬なのには違いないらしく、カールはピタリと動きを止めると唯依から離れた。
「……はぁ……はぁ……うっ、ぐ、……ふぐぅ……うっ」
情けなくしゃくり上げ、嗚咽する唯依を見下ろしながら、大佐はポンとその頭に優しく手を置いた。
「クク。いやはや、すまんな、中尉。まさかそこまで嫌がられるとは思っていなかった。私が先走りすぎてしまったようだ」
薄ら寒い事を平然と言ってのける目の前の男は本当に自分と同じ人間なのだろうか。もしかして、人に擬態したＢＥＴＡか何かではないのだろうか――そのような妄想を抱く唯依に、大佐はなおも優しく語りかけた。
「そんなにカールの嫁になるのが嫌なら、仕方があるまい。この話は無かったことにしよう。……別にその事で不知火弐型の開発等に口を出すつもりはないから安心したまえ」
不安が顔に出ていたのだろう。ホッと胸を撫で下ろした唯依は、しかし数秒後にまたもその安堵を悔やむことになる。
「ただし、……一つだけ、頼みがある」
「頼み、ですか？」

大佐の顔にベッタリと貼りついた笑みに、唯依は怖気を感じつつも黙って話を聞く他無かった。

■■■

「……うっ、ぐ」

今の自分を端から見た場合、どれだけ惨めなコトだろう。ユウヤや、それにアルゴス試験小隊の面々ならどう感じるか。考えただけで暗澹たる思いに囚われ、唯依は目眩がした。

「こらこら中尉、手が止まっているぞ。もっと動かしたまえ」

「……は、はい」

大佐に命じられるまま、唯依は自らの乳房へ添えた手に力を込め、グッと圧迫しながら上下に揺らした。そうする事で乳房に挟まれた巨獣根が激しく扱かれ、カールが嬉しそうに吼える。

「んっ、……く、ふぅ……はぁ」

「おお、おお。キモチがイイか、カール。良かったなぁ、中尉。君のそのドスケベなエロ乳の良さは、犬にもわかるようだぞ」

「は、はい……カールさんの、犬チンポ……ぐ、く……すごく、逞しくて……素晴らしい、です……大佐……ん、あぁっ」

大佐の頼みとは、カールと結婚まではせずともいいので発情期にある彼をせめて慰め、満足させてやってくれないかというこれもまた異常な内容だった。そうして、挿入だけはどうしても嫌だという唯依の懇願に対し、大佐は『ならその胸やロを使っていつも私達にしているのと同じように真心を込めてカールに奉仕したまえ』と命じたのだ。

誰が通りかかるかもわからない中庭の、僅かに茂みによって隠された位置で、膣内にはバイブを挿入されたまま犬の肉棒に奉仕する。あまりの酷たらしさに唯依の頬を涙が伝った。

「ん、チュ……むふ、はむぅ、ふぅ……ンッ……レロ……あ、ああ、苦くて……しょっぱい……犬チンポ、臭い……い……やぁ」

赤黒い肉筒から漂う獣臭さに、唯依は顔を顰めた。犬というのは綺麗好きな動物らしく、思っていたよりも不潔感はなかったがそれでも異種、獣だ。人間相手に奉仕を強要されるのだって気持ちが悪くおぞましいのに、犬が相手など正気ではない。

(うっく……どうして、こんな……犬を相手に奉仕、など……この男……ニヤニヤと、何が楽しいのだ……う、うぶっ、……ぐ、それにしても、なんて大きいの……それに、硬くて……中に骨でも入っているみたいな……ンッ、うぐ、ふぅ!)

唯依が感じた通り、実際犬の陰茎には陰茎骨と呼ばれる骨がある。限界まで膨張したそれに口腔を突かれ嘔吐いた唯依をカールはさらに容赦なく突いた。

「げふっ、ごほ……う、うぶぅう、ぐぅううう!!」

「タカムラ中尉の乳マンコと口マンコがよっぽど気持ちがいいようだなぁカール。ククク、存分に愉しむんだぞ」

(もぉ、もぉイヤァあぁっ!)

挿入を免れたとは言え、こんな無惨な凌辱、とてもではないが耐えきれない。いっそ舌を噛み切って死んでやろうかとも考えた唯依を思い止まる事が出来たのは、不知火弐型、そしてユウヤに懸けた彼女の夢があったればこそだった。

自分がここで死のうものなら、今後計画がどうなるかはわからない。それに、どんなに汚辱にまみれようとも自らの夢が実を結ぶ瞬間を見てからでなければ死んでも死にきれないとも思った。

(……そのためになら、このくらい……耐えてみせる……っ、それにこの犬……カールも)

されるがままとなっている犬を唯依はチラリと見上げた。

(飼い主達と比べれば、よっぽどマシ……だもの。……そうよ、あの下衆共と比べたら、この子の方が全然マシ、だわ)

「……ん、ぢゅぷ……レロ、ぢゅるる、ぬぷ、はむぅ……♥」

「ん?」

ふと、カールに奉仕する唯依の雰囲気がそれまでよりも柔らかく変化したような気がして大佐は小首を傾げた。まさかもう壊れてしまったのかとも思ったがそうではないらしい。

「はぁ……♥ んむ、ンン、……んむ、ぢゅろ、チュッ♥ ……ああ、カールさんのおちんぽ……犬ちんぽ……美味しい……、私なんかで、こんなに興奮してく

れている……なんて……ぇ、あ♥」
「ほ、ほぉ。どうやら中尉も興奮してきたようだな」
意表を突かれた、とばかりの大佐の態度に、唯依は内心でほくそ笑んでいた。向こうの思い通りになるよりはこの方が幾分も良い。溜飲も下がるし、心に余裕も生じてきた。
(……それに――)
いったん平静さを取り戻し改めて見てみれば、カールは図体が並外れて大きいというだけで愛嬌のある顔をしている。こうして奉仕している間も、興奮して腰を振ってはいるが時折吼える以外は静かなものだ。元来は大人しい犬なのかも知れない。
(ああ、なんだか……可愛い、……気も、する)
「んちゅっ、むぅ……んぷ、ふぁああ♥　……どう、カールさん？　私の、唯依のおっぱいと、おクチ……キモチ良い、ですか？　犬ちんぽ、ふくらんで……きた……ンレロ、ペロ、ペロ……ん、ふぅ♥」
舌先で獣棒の先をくすぐりつつ問いかけた唯依の顔を、カールは真っ直ぐに見つめていた。犬の感情など唯依にはとても計り知れないものだったが、その視線には熱が籠められていた。雌を慈しむ情熱が、はっきりと。
(そんな、そんな眼で、見ないでほしい……そんな風に見られたら、私、もっと……く……ぁ)
異常なことだと自覚はしつつも、唯依はせめてカールにこのひとときだけでもキモチ良くなって貰いたいと思い始めていた。彼だって本当は同じ犬を相手に、己の血を残すために性交渉をしたかったはずだ。それを、下劣な主人を持ってしまったばかりにこのような誤った行為に没頭させられてしまっているのだから、言うなれば被害者でもある。
そう考えると、どうにももどかしくて唯依は乳房をさらに激しく動かし、肉筒を擦りあげた。
(私……は、あなたのお嫁さんにはなってあげられない、けど……今は、今だけは……キモチ良くさせて、あげるから……)
「あっ♥　……カールさんのおチンポ、ビクビクって、震えが激しくなって……先ッポから、お汁が……ん、んくっ、ちゅう、ん、あ……んむぅ、ちゅるる♥……まだ、先汁のはず……なのに、こんなにいっぱい……苦くて、臭いの、溢れさせて……美味し……っ♥」
「……犬のカウパー汁をこんなに美味そうに啜るとは、いやはや……まったく、大した雌犬ぶりだな、中尉」
大佐からの皮肉に対しても、今の唯依は感情を乱れさせたりはしなかった。
「は、い……カールさんのカウパー……先走りの犬ちんぽ汁、とても、美味しくて……はふぅ♥　もっと、もっとキモチ良くしてあげたく、なる……のぉ♥」
あまりの豹変ぶりに呆気にとられている大佐を後目に、唯依はギュッと乳房を圧迫し、乳膣内の獣棒を締めつけた。途端、カールの陰茎の根本が膨張し、柔肉をグイグイと押し上げ始める。
(これ……もしかして、射精、するの？　膨らんでるのは……玉、ではないようだけど……人間と、全然……違う)
犬のことをよく知らない唯依にとって、その射精のメカニズムはまったく未知のものだった。本来は雌犬の膣内で膨張し、射精中に陰茎が抜けないよう固定するための亀頭球と呼ばれる部位がもたらす圧迫に驚かされつつも、唯依はさらに強く乳圧をかけた。その状態で肉棒の先端を咥え、激しく吸引する。
「んむっ、ンチュッ♥　ぢゅるるる、んぢゅるるるるッ♥　ふむ、むむぅうう、んぅうううう♥」
あまりの快感に、カールが蕩けるような鳴き声をあげた。唯依からもたらされる快感に完全に酔っているのか、既に主の命令など関係無くなっているかのようだった。
(ん、ああ……犬チンポ、また大きくなって、震えてきた……これ、もうすぐ射精、するのよね？　……私、犬を相手に胸と口を使って、一生懸命に、奉仕して……射精まで……っ)
自身の行いを省みつつも、不思議と唯依に後悔は無かった。これで全てが終わるという安堵もあったが、心地よさそうにこちらを見ているカールに幾何かの愛おしさのようなものも感じる。
(ええ、せめて……射精がおわるまでの間くらいは、彼の妻でいてあげるのも、いい、かも……しれない……あっ♥)
その時、カールが切なげに遠吠えし、ついに射精が始まった。
「んぶっ!?　んぐ、んぐぅううんむぅうううう♥」
人間の射精よりも遙かに大量の精液が、とてつもない勢いで喉を打ち、流れ込

んでくる。その放射を感じとりながら、唯依は唐突に達してしまっていた。
「ふぶぅううう、ぐ、ひぐぶぅううううううッ♥」
（な、なにこれ？　なに、なんなの……んぁああはぁああ♥　こ、これ、バイブのせい、なんかじゃない……犬の、カールの精液……チンポ汁飲みながら、私、感じて……イッてしまって……いるの……？）
信じられないが、事実として唯依は絶頂を迎えていた。
膨張しきった巨獣根によって乳房を内側と下側から圧迫され、射精によって竿が脈打つたびにその微動で感じてしまう。これは唯依が人一倍敏感だからとか、これまでに散々性的に調教されてきたからとか、そういった問題ではなかった。
（あぁあああああっ♥　カールが、カールのおチンポ、まだ私の胸の中で、跳ねてる……凄く元気良く跳ねて……これ、今までの男達とは……違う……ただ熱いんじゃなく、温かくて……わからない、わからない、けど……――）
「ひはぁあああああああああああンッ♥」
長々と続く射精に、ついに精飲しきれなくなった唯依が口を放し、大きく身体を仰け反らせた。全身を快楽に打ち震えさせ、それでも乳房に添えた手の方はまだ放していない。カールの射精を促すかのように強く、強く圧迫しながら谷間膣で肉棒を刺激し続けている。
「こ、これは……はは、ははは！　タカムラ中尉、まさか、まさか犬を相手にパイズリで絶頂を迎えるとは！　なんという、君には本当に驚かされてばかりだ！　これでは本当に雄犬と雌犬のまぐわいのようじゃないか！　ク、ククッ……もっとも、普通の雌犬はパイズリなど出来はしないがね。クハハハハハハ！」
そんな大佐の哄笑は、唯依の耳にもカールの耳にも届いていなかった。甘い霞がかった頭でボンヤリとカールを見上げる唯依の胸の中では、まだ噴水のように射精が続いていた。
（犬の射精、長い……まるで、精液で、私をマーキングしているかのよう……それに、おチンポ……これ、射精が終わるまでは萎えないの？　それとも……カール、あなた、まだ……）
「……したりない、の？」
怖ず怖ずと尋ねた唯依の目には、カールが頷いたよう見えた。
（でも、これ以上……これ以上は、私……ダメよ、カール。そんな目で見ないで……お願い……っ）
子宮の奥がキュンと疼いた。
硬くしこったままの乳首も熱い。顔中に付着した精液が垂れていく感触に、唯依は酔わされていた。
「……物足りないのは君の方ではないのかね？　なぁ、タカムラ中尉。ク、ククククク！」
「あっ」
切なげな唯依の変化を察したのか、大佐は再び自分が優位に立てた事を確認しつつ、唯依の肩を押した。それだけで、武道を嗜んできたはずの身体が呆気なく仰向けに転がされてしまう。
「本当は、もっと欲しいのではないかな？　……カールの、この逞しいペニス、いや……チンポが」
「ち、ちが……私は……っ」
否定しようとした唯依は、自分が流した愛液によって地面に小さく水溜まりが出来てしまっていたことに気付いた。
（そんな……違う、私……いくらなんでも、犬と……カールとこれ以上のコトは無理……無理よ……！）
イヤイヤと小さく首を振る唯依に、カールが覆い被さっていた。その眼はあまりにも真っ直ぐ、射貫くように唯依の――発情した雌犬の痴態を見つめていた。
「だっ、だめっ……カール、お、お願いだから！　それ、それだけはダメ……ダメ、よ……お」
なんて力の無い拒絶なのだろう。しかしこればかりはどうしても受け容れられない。当初カールに対して抱いていた恐怖も嫌悪も今では大分薄らぎ無くなろうとしていたが、それでも犬との性交への抵抗まで消えたわけではなかった。
膣内に、犬の肉棒を挿入され、射精される。
もしも自分がその行為を受け容れ、あまつさえ絶頂を迎えてしまったとしたら……きっと、もう二度と戻れなくなってしまう。
人間としての尊厳を捨て去り、正真正銘の雌犬へと堕ちてしまう……そんな確信が、今の唯依にはあった。
「いやっ、……やっ、いや、だぁ……んぁああっ！」
カールの肉筒が、下着の上から濡れそぼった秘裂を撫でた。それだけで全身を快感の電流が流れ、目の奥で火花が散った。

と、そんな唯依の様子を睥睨していた大佐が何事か気付いたようにしゃがみ込んできた。
「おっと。いかんいかん、カール、少し待つんだ」
「た、大佐、何を――ひぁうッ!?」
しゃがんだ大佐は突然唯依の下着をずらすと、既にトロトロに蕩けていた秘裂に指を突っ込み、その中からバイブを引き抜いた。
「んぁっ、ああぁああああっ♥」
強引に引き抜かれた衝撃で唯依の身体がビクビクと波打つ。今は意識をしっかり保たなければならないと思うのに、その陶酔はあまりに甘過ぎた。
(だ、め……目眩、して……熱っ……カラダ、震え……このままだと、抵抗……出来な……ん、……やっ)
「ダメ……カール、あっ……た、助けて……ユウ、ヤぁ……」
想い人に助けを求め、その幻影に縋りながら涙ぐむ唯依の膣口へ、カールの雄々しい獣根が突きつけられる。
「いや……いやぁ、あぁああ……〜〜〜っ」
「クハハ。嫌だ嫌だと言いながら、君のスケベマンコはさっきからカールの肉棒が欲しくてヒクついているではないか」
大佐の言う通り、肉体の反応のみを見れば、ここまで昂ぶってしまった状態ともなれば満足しきれない不足分を男根を挿入されることで補って貰いたいという欲求はある。
(わ、わた、し……私は、日本帝国軍……斯衛所属……篁唯依、なのだぞ。それが、こんな……犬を相手に淫心を燻らせるなど、あるわけが、あっていい道理が……無いっ)
必死に己を鼓舞しながら、唯依はカールを押し退けようとした。相手が屈強な大型犬と言えどもこれまで習い覚えた武道の技は通用するはずだ。そう信じてカールの力強い前脚に手をかけようとするものの、巧く掴めない。
「は、放れ、ろ……ぐっ、うぅ……あっ、あぁッ!?」
先端が秘肉を割った。
このまま埋没させては不味い。せめて腰を引こうと思うのに、唯依の身体は別の意思によって支配されてしまったかのようにまるで言うことを聞いてはくれなかった。

「やめっ、……やめ、てぇえっ! やだっ、やだぁああっ!」
一度は払拭されたはずのカールへの恐怖と嫌悪が込み上げ、唯依は絶叫した。そうしている間にも猛りきった肉棒は唯依の膣肉を押し拡げ、奥へ、奥へと侵入してくる。その都度全身を駆け巡る官能に喘ぐまいと唯依はついに口を噤んだ。
「んっ、ぐ……うぅ……ぐ……うっ、う〜〜〜〜っ」
「いやらしい貌をして、まったく度し難い変態だな、中尉は。どうだね? 今からでもやはりカールの嫁にならないか?」
(犬の、嫁に……など……誰が……誰が、なる、もの……か、あ……ぐ、ひぃいいぁああああッ♥ だ、め……力、込めてるはず、なのに……ちんぽ、はいってきちゃ……う、うぅうう♥)
既にカールの肉棒は三分の一程も唯依のナカに埋まり、物足りなさそうに鳴きながら、舌で唯依の下乳を舐め上げてきた。
「はひぃいいいっ!?」
突然の不意打ちに身体を震わす唯依を見てそれが有効だと判断したのか、カールはさらに激しく胸を舐め攻めた。
「ひゃっ、や、やらっ、こん……あぁああっ!? ……あっ、う、はぁあ……♥ そっ、そんな……なめ、られたら……あ、ぐっ」
ますます深く沈み込んでくるカールの肉棒に、唯依の肉体は否定のしようもなく悦び、噎び喘いでいた。
(もぉ……なにも、かんがえられな、い……キモチ……いい……犬ちんぽ……いれられて……ユウヤ……ちち、うえ……わたし、……わたし、は……――)
「そら、カール。お前の嫁はもっと奥まで挿れてもらいたがっているぞ。さっさと挿入して、勢いよく突いてあげなさい」
主人の言葉に従うように、カールは抵抗の弱まった唯依の最奥まで一息に肉棒を突き入れ、自らの勝利を誇るかのように吼えた。その遠吠えに劣らぬ唯依の嬌声が中庭に木霊する。
「うぁああぁああああぉおおおおおおおおおおッ♥」
人としての尊厳が、完全に崩壊していく。
「ひはぁぁっ♥ あっ、お、んぉおおおおおお♥」
「おいおい中尉。人が来ても知らんぞ? ……もっとも、この声では犬同士の交尾にしか聞こえんか」

嘲るような大佐の言葉などどうでもよかった。犬同士の交尾だと言われれば、なるほど、そうかも知れない。
けれど、それでいいのだ。
(だって、だってだって……！　こんな、こんなにキモチ良いだなんてぇえっ犬チンポすごい、すごいいいいいっ♥)
「きゃふぅうぅぉおおおっ♥　ほぉおおぉおひぃいいいい♥」
人間離れした鳴き声をあげながら、唯依は狂ったように腰を振りカールと深々と愛し合った。その姿は自ら獣になろうとしているかのようで、大佐までもがいつそ哀れと眉を顰めた程だ。
(もっと突いて犬チンポ突きまくってぇえええ♥　人間なんか比べものにならないいいい壊れるぅう私壊されるぅうう♥　犬チンポ激しすぎよぉおっ♥)
「んほぉおっ♥　おほぉおおおおぉおおおおお♥」
カールの舌が唯依のヘソを、乳房を、乳首を舐め、涎まみれにしていく。この雌は自分のモノなのだと言わんばかりに。その行為が今の唯依にはたまらなく悦ばしかった。
(ああっ、カール、カールぅ♥　わたし、カールのお嫁さんにされるっ、犬嫁にされちゃってるぅうう♥　でもいい、それでいいのもういいのっ♥　だって犬チンポこんなに、こんなにキモチ良いのだから……ぁあああああっ♥)
「ふむっ、んぢゅちゅっ、ぬぷ、レロレロ……ぢゅぷ、あぁ♥　お、んぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお♥」
伸ばされたカールの舌に自らも舌を絡ませ、唯依は誓いの口付けを交わした。これで二人は結ばれたのだ。自分はカールの妻となり、こうして彼と交わりながら一生を添い遂げる。
「ふひぃいいいいいいいいいぃイイイッ♥」
広がっていく幸福な未来へ、唯依は心の底から歓喜した。

凄まじい勢いで腰を振るう二匹の獣を見下ろし、大佐はフッと息を吐いた。本当に誰か来たらどう説明したものか。カールの飼い主として、むしろ愛犬が欲求不満の女性士官の手によって襲われ虐待されたと言ってやるのもおもしろいかも知れない。
「だが、これでもう自分の本性が卑しい雌犬であると言うことに一片の疑いもあるまいな、中尉も。……クックク。日本人など、そうあるべきなのだよ。身も心も犬として、な」
浅ましい雌犬の耳にはもう届いてはいないだろうなと自嘲しながら、大佐はクルリと踵を返した。雑務が滞っていることだし、いつまでもペット達の相手ばかりもしていられない。
と、執務室に帰る途中、大佐は若い兵士達と擦れ違った。
(ん？　……ああ、彼らは確か、中尉の試験小隊の)
思わず口元が綻ぶ。このままいけば、嫌でも中庭から聞こえる犬達の交尾の声に気付くだろう。その後、いったいどうなるか。
「ク、クハハハ……」
唯依に待ち受けるであろう凄惨な未来を想像し、大佐は酷薄な笑みを浮かべると、足早にその場を後にした。

〜了〜

あとがき

はじめまして＆こんにちは。ここまで読んでくださり
誠にありがとうございます。
今回はマブラヴオルタネイティヴ・トータルイクリプス本ということで、
以前より描きたいと思っていた篁唯依を描いてみました。
個人的にはかなり好きなキャラクターなのですが、
マブラヴというジャンルと、なんだかんだと描くのが苦手な
造型だったりと色々重なってしまいあまり描く機会が
ありませんでしたので、薄いながらも本を作る事となりました。
トータルイクリプスはゲームの方も楽しみなのですが、
できれば18禁がよかったなぁ、と思ったり。
唯依姫以外にもラトロワ中佐、タリサ、クリスカなんかも
好きなキャラなのですが、
なんだかんだとあんまり描いていませんね。
機会があれば描きたいところ。

それはそうと最近はやりたいゲームが多くて、
なかなか時間がとりづらく。
原稿やりつつちょこちょこゲームを進めていければと思っております。
キルタイムコミュニケーション発行のアンソロジーに
漫画を描かせて貰ってたりしますので、
そちらの方も宜しければ見てやってくださいませ。

それでは。

奥付

誌名　　：斯衛躾辱

発行者　　：寒天

発行所　　：寒天示現流

発効日　　：2011/2/6

印刷所　　：くりえい社

サークルサイト：http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/

ゲスト　　：忌呪様（黒色彗星帝国）

※18歳未満の購入はご遠慮してください。

寒天示現流